

多職種連携カンファレンスがもたらした多職種連携実践能力への影響

社会福祉法人 枚方療育園 関西看護専門学校 木内有美

【目的】日本の人口構造や家族形態とその機能の変化に加え、医療の高度化・複雑化に伴い、保健・医療・福祉の連携・協働が求められている。多職種が連携・協働するには各職種の役割の理解だけでなく、それぞれの強みを活かした連携・協働が求められる。本校では医療チームの一員としての連携・協働を教育内容に取り入れているが、患者—看護師関係に焦点をあてた教育が中心となっている。そこで、今回、多職種連携の実践能力の育成を目指して多職種カンファレンスへの参加を導入したことによる影響を報告する。

【調査方法】

1. 対象者：多職種連携カンファレンスに参加した経験がない 89 名の学生と参加した経験がある 71 名の学生
2. 期間：2019 年 9 月～2020 年 12 月
3. 内容および測定用具
 - 1) 基本的属性：多職種連携カンファレンスに参加した経験の有無
 - 2) インタープロフェッショナルワーク実践能力評価尺度（以下、CICS29）の調査用紙に自由記載欄を設けた
 - 3) 倫理的配慮：本研究は研究者の所属する施設の倫理審査委員会で承認を受けたのち、対象者に研究の趣旨と匿名性の確保及び参加任意性を説明し、無記名自記式質問紙調査による留置回収法とし本人が特定できないように配慮した。尺度は開発者の使用許諾を得て用いた。

【結果】集められたデータは全て単純集計した上でエクセルの分析ソフトを用いて、関連 2 群の差の t 検定を用いて分析した結果、CICS29 の下位尺度のうち、「Ⅰプロフェッショナルとしての態度・信念」・「Ⅲチームの目標達成のための行動」・「Ⅴチームの凝集性を高める態度」・「Ⅵ専門職としての役割遂行」において有意差があった（ $p < 0.01$ ）。また、「Ⅱチーム運営のスキル」・「Ⅳ患者を尊重した治療・ケアの提供」では有意差の傾向があった（ $p < 0.05$ ）。尺度全体においても有意差が認められた（ $p < 0.01$ ）。また、自由記載の回答としては看護の専門性とその役割を考える機会を得たとあった。

【考察】渡辺（2018）は専門職連携教育への参加者と不参加者の学びには有意差があり、それは看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標との整合性でみると、「Ⅰ群ヒューマンケアの基本的能力」、「Ⅳ群ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力」であると述べている。今回の調査結果と自由回答から鑑みた結果、学生が多職種連携カンファレンスに参加することは「Ⅰ群」および「Ⅳ群」への該当だけでなく、「Ⅴ群専門職者として研鑽し続ける基本能力」にも影響を与えたと考える。